山を追われて

高野敦志

目次

山を追われて　1
あとがき　10

山を追われて

三十過ぎの権太は、老いた母と畑で人参の種をまいていた。澄んだ青空のもと、日の光を浴びて働くのが好きだった。遠くに見える山には、雪がまだ残っており、ウサギが寝ているように見える。死んだ祖父はマタギと呼ばれる猟師だった。春になると、冬眠していた熊を撃つ穴捕りをしていた。汗をぬぐって山を見上げるたびに、祖父が見守ってくれている気がした。

二十歳の頃、浜通りで大きな事故があり、目に見えない毒が空から降ってきた。村人の多くが畑を捨てて、遠くの町に避難していった。隣の家の畑も放置され、雑草が生い茂るままになった。それでも、権太は母とこの村にとどまることを選んだ。

そんな暮らしにも、変化が訪れようとしていた。昨年の末、自然を守るために、日の光で電気を作るという話を、役場の人が話しているのを聞いた。いい話だと思ったが、祖父が猟をしていた山の木は切られ、はげ山になってしまった。電気を作るための黒い板が、山肌いっぱいに敷かれていった。熊が里に下りてくるようになったのは、それからだった。

収穫を前にした人参は、多くが掘り起こされ、大小の足跡と、すりつぶしたような糞が畑に残っていた。このままでは、今の生活を続けていけない。権太は祖父が残した猟銃とリュックサックを背負い、ナガサと呼ばれる短刀を腰に差して、無残に削られた山を登っていった。雨が降った後だったので、土がむき出しになった所には、水が流れた溝ができていた。沢に沿

って進んでいったとき、ざわざわという木が揺れる音がした。

　ブナの林の間から、黒くて大きな体がのぞいていた。こちらの足音を聞きつけたのか、茂みの中から一頭の熊が姿を現した。後ろ足で立ち上がると、胸のあたりに白い三日月の毛が見えた。歯をむき出してウーウーうなると、こちらに向かって迫ってくる。権太は逃げ出したくなるのをこらえて、熊に向かって銃を撃った。肩のあたりを傷つけたのだが、それでも熊は走ってくる。二発、三発撃つと、熊は茂みの中にどうと倒れた。

　一人で熊を解体することはできない。役場に連絡して、始末を頼むしかないだろう。とりあえず、引き返そうと思ったところ、林の奥から「おいおい」という声がした。誰か倒れている

のだろうか。茂みを踏み分けていくと、犬のような大きさの子熊が鳴いているではないか。母親が殺されたのも、まだ分かっていないのだろう。このまま放置しても、生き長らえることはできない。リュックサックからロープを取り出すと、子熊を縛り上げて家に連れ帰ることにした。

「熊の子なんか連れでぎで、なじょすんだ。すぐに大ぎぐなっぺ」

「親を殺しちまったがら、放っておげば死んちまうべ」

「そだこど言って、誰が世話すんだ」

　母は子熊を飼うことに、すぐにはうんと言わなかった。それでも、哺乳瓶と粉ミルクを買ってきてくれた。農家に嫁はなかなか来ないから、黒い毛が生えた孫ができたようなものだった。

抱き上げると、母は目を細めながらあやしている。
「めんこいなあ。まるまる太った犬の子みだいだ」
「んだなあ」
権太はメスの子熊に「あかり」という名前をつけた。家の中が少しでも明るくなってほしいという願いからだった。あかりは黒くまん丸い目に丸っこい耳、とがった口をしていた。母の腕から下りると、畳の上を走るのだが、すぐに転んでしまい、でんぐり返しをしている。生きている縫いぐるみのようだった。ただ、足の裏は毛が生えておらず、形は人間と同じだった。哺乳瓶を与えると、前足で上手にはさんで、乳首からごくごく飲みはじめた。人間の赤ん坊もこんな飲み方をするのかと、権太は思った。

しばらくして、リンゴや白菜をやってみた。与えれば与えるだけ食べて、どんどん成長していった。時には、鮭の切り身をやったが、一切れでは満足できないのか、権太や母が食べている物までほしがる。座敷の中に閉じこめて、畑仕事に出かけたのだが、帰ってみると、仏間の障子は破られ、台所の戸棚は開けられていた。ゴミ箱もひっくり返されて、魚の骨や野菜くずがまき散らされていた。
「いい加減にしらんしょ、この熊は」
母が怒ると、あかりは歯をむき出して、カチカチと鳴らした。
驚いて権太がうちに入ってくると、あかりは後ろ足で立って、ウェーと鳴くと、うれしそうに舌を出した。そこで、普段は首輪をつけて柱につないでおき、家にいる間だけ、座敷で遊ばせ

るようにしたが、柱や壁（かべ）にはいくつもの爪痕（つめあと）が残った。
「この熊、なじょすんだ。うぢにはただ飯食わしておぐ余裕（よゆう）はねえんだぞ」
「げんとも、おっかさま、あらほどめんこがってくれだのに」
「熊がめんこいのは子供（こども）のうぢだ。大ぎぐなったら、熊の胆（い）取るが、毛皮はがすしかねえべ。じさまならそだはずだ」
胸（むね）が張（は）り裂（さ）ける思いで、権太は首輪をつけたあかりを庭に連れていった。遊んでくれるものと思って、あかりはぐいぐいロープを引（ひ）っ張（ぱ）った。柿（かき）の木につなぐと、座敷の奥から猟銃を取り出した。熊は何かおかしいと気づいたらしい。おびえたように震（ふる）え、丸い目でこちらをじっと見つめている。
「おらにはでぎねえ」

　次の日の午後、軽トラックと檻（おり）を借りてきて、あかりを生まれた山に返すことにした。中に好物の鮭を入れると、あかりはおとなしく入っていった。母に手伝ってもらい、荷台の上に載（の）せると、あかりは連れていかれると知って、グォーと遠吠（とおぼ）えをした。
　前の年の台風で、山はすっかり荒（あ）れていた。電気を作る板は、そこかしこに散らばり、赤土が流れ出て、斜面（しゃめん）が崩（くず）れているところもあった。権太は山の裏側（うらがわ）の、まだ林が残っているあたりに着くと、荷台の檻を開けた。あかりは下におりて、地面のにおいをかいだ。そのまま林に入っていくと思ったが、振（ふ）り返（かえ）ると、小走りでやってきて権太に抱（だ）きついた。爪がシャツを破って食（く）い込（こ）んできた。とっさに権太は、腰につけていたナガサと

いう短刀で、あかりの胸を刺(さ)した。これは悪い夢(ゆめ)ではないか。が、夢ではなかった。しかも女の声で、息も絶(た)え絶(だ)えに話しだした。

「はげ山になった山には、もう食べる物がありません。また里に下りていったら、他の猟師に撃たれたでしょう。あなたの手にかかって死ぬのは本望(ほんもう)です。ずっと暮らしていたかった。そしたら、いつかは人間になれると思ったのに……」

あとがき

蝦夷(えぞ)とアイヌの違いは何か。東北各地にはアイヌ語に由来する地名が多く残っている。江戸時代中期まで、津軽にはアイヌの集落が存在していた。アイヌの彫(ぼ)りの深い顔は、樺太(からふと)や大陸の民族との通婚によるものだろうか。とはいえ、縄文人(じょうもんじん)の遺伝子を最も多く受け継いでいるのは、アイヌだと言われる。現在のアイヌは和人との混血が進んでいるためか、かつてのように彫りの深い人に出会うことは少なくなった。

　東北地方にはマタギと呼ばれる狩猟民がいるが、習俗や言葉にはアイヌ文化に由来するものが多い。マタギが行う熊の狩猟にも、アイヌと共通するところが少なくない。アイヌは熊を撃

ち取ると、子熊を集落に連れて帰る。母熊がいなければ子熊は死んでしまうからである。幼いうちは子供の遊び相手になるが、大きくなると檻（おり）に入れ、イヨマンテ（熊送り）で成長した熊を生贄（いけにえ）にするのである。この物語はそれをマタギの環境に置き換えてみたのである。

　東日本大震災による福島第一原発の爆発で、福島は甚大な被害を受けて広範囲が放射能に汚染された。その後、再生エネルギーの利用が叫ばれるようになり、日本各地の山が削られて、メガソーラーが敷設されるようになった。熊が人里に下りてくるようになったのは、太陽光発電のために山が削られ、すみかを奪われたことが関係すると見られる。こうした状況が物語が生まれた背景である。

二〇二五年三月七日

高野敦志